

「まぐれ」と「たまたま」(前編)

新年のご挨拶をついこの間にしたような気がするのですが、早2月。真冬です。この稿を書いている窓の外は雪です。同時にNYが雪で機能がマヒしているというニュースを聞きました。欠航した飛行機の便数は6000便だとか。やはり国力の差を感じますね。日本も大寒。インフルエンザもピーク。お気を付けください。

さて、今日の話はある一冊の本をご紹介します。「まぐれ」2008年にダイヤモンド社から発売されています。私はてっきりこの本のご紹介はNLで取り上げていたと勘違いしていました。非

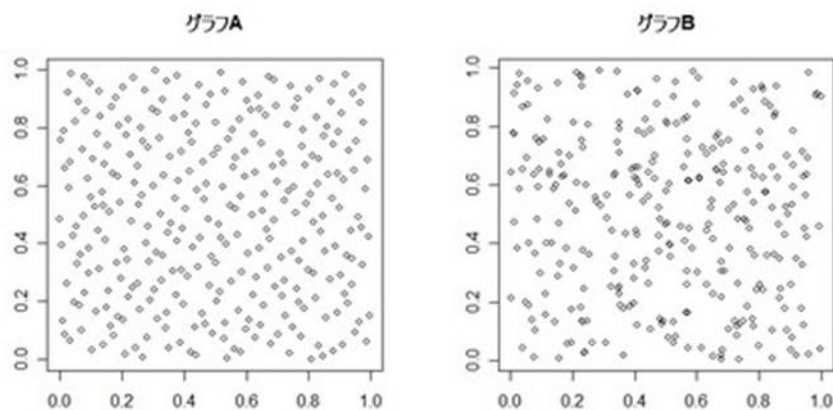


常に刺激的で面白い本です。著者はナシーム・ニコラス・タレブ。レバノンの出身、「学際的な立場から不確実性の問題に取り組む数理系トレーダーにして大学教授。その興味は哲学、数学、ファイナンス、そして社会科学に及ぶ。トレーダーとしては、ニューヨークとロンドンでの20年にわたるキャリアを持つ。大学教授としては、マサチューセッツ大学アマースト校で学長選任教授を務める。専門は不確実性科学 (Wikipediaより)」。現在はディーラーからは足を洗い著述業に専念しているそうです。行動経済学、確率論、哲学、心理学など非常に多岐にわたる優れた学者です。それゆえ一般向けに書かれているとはいえかなり難解な個所もあります。そういうところは全て読み飛ばしていきます。恐らく7年前の初見の時も同じだったと思います。進歩なし^_^;

彼には常々不思議に思うことがあった。この本の副題になっています。「投資家はなぜ、運と実力を勘違いするのか」要約をしてみます。

1. 人間は、たまたま生じた出来事(ノイズ=まぐれ)に対し、過剰に意味(シグナル)を見出してしまう認知のクセを持っている。
2. 人間は、世の中で生じる出来事の因果関係を、自分たちが思っている以上に誤って把握している(「運を実力と勘違いする」)。だが、そのことに気づかない。
3. なぜなら人間は、多くの場合、論理的思考モードではなく感情的思考モードによって日々の意志決定をこなしているから。また、意識的に論理モードを駆動させようとしても、無意識的な感情モードの割り込みを抑え込むことは難しいから

ほら、難しい（笑）。でもこれだけでは行動経済学の本じゃないかと突っ込みをいただけそうですが、それにとどまらない。まずはまぐれ（ランダム）について語ると、次の二つの絵の中でどちらがランダムかを考えてみましょう。



多くの人はグラフ A を選択します。ところが本当のランダムな状態はグラフ B です。グラフ B は乱数を使って作り出されたものですがところどころに塊（クラスター）や空間が存在します。塊や空間は全くまぐれで発生しているのに、観察者はここから何か意味を抽出しようとします。もちろん意味はありません。ただの偶然だからです。



コイントスの例を考えればわかりやすい。コインを何回かトスしたとき、「表、裏、表、裏、表、裏…」と交互に出ることはあまりない。ランダムに投げると、「表、表、表、表、裏、表…」と、そこに擬似的な一定の規則性が生じるのが常だ。ところが人間はしばしば、この「表、表、表、表」という配列に、「こんなに表ばかり出るのはおかしい！理由が存在するに違いない！まぐれでこんなことは起きない！」と感じ、科学的＝事実に間違っていても unnecessary 理由付けを行ってしまう。本当は「乱数は乱数であるがゆえに、集まることもある。そして、集まることは単に偶然であって意味はない」のです。

本書は一級の**人生論**（人生を啓蒙するサイエンスエッセイ）として読むのが正しいと感じます。「投資」というテーマは、著者が議論を展開する上でのあくまでケース（事例）にすぎませんとにかく、極めて密度が濃いので、投資に興味のない人でも十分楽しんで読むことができます。少し話が難しくなってきました。人間がいかに合理的な行動や心理ができない例を本書の中からご紹介します。人物の名前は全てか生だと思えます。

まずは、感情思考モードの事例です。

■マークは地方都市で育ち優秀な成績で育ち、ハーバード大学を卒業、エール大学でMBAを取得し弁護士として忙しい日々を送っている。年俸は50万ドル。エリートですよ。でもマーク夫

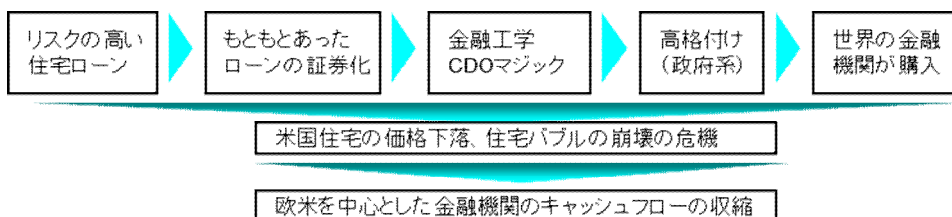


妻は毎日ストレスに襲われる。パークアベニューの豪華なマンションの一室に住んでいるのですがそこでは自分たちは底辺。もっと広い部屋に住まい年俸数百万ドルを得ている隣人に囲まれている。「どうしてもっと稼げないのか?」「奥様同士のお付き合いも妬ましいことだらけでほとんど疲れてしまう」。年俸6000万円を稼いでいて不幸?私にはわからない世界ですが、事実だそうです。米国全体を見れば彼らは収入で言えば**トップ1%内、田舎に帰れば断トツのエリートとして凱旋できます**。なぜマーク夫妻は幸せを感じることができないのか。それは自分より下の99%の人々のことを忘れているからです。感情的な思考回路しか働かなくなっている例です。なぜでしょう。それは彼らが失敗した人を排除する地域で、成功した人たちに囲まれて暮らすことを選んだからです。

■もう一つ、ある州の州都に住まうディーラー、ネロ。道を隔てて住まう同じくディーラーのジョン。ネロは性格もあるのかあまりリスクの高い取引には手を出さない。例えて言えば6勝4敗。しかし顧客には着実に儲けをもたらす。対してジョンはリスクの高いディーリングを好む。同じく例えれば9勝1敗。ジョンは破竹の勢いでたちまちスターディーラーの仲間入り。生活も



派手でネロからしてみれば面白くない。しかし数年の間にジョンは家を立ち退くことになる。ただ一度起こした失敗のために財産の全てを失ってしまう。ここでタレブが言いたいことはたとえ9連勝してもそのあとの1敗ですべてを失うこともあり得る。ジョンは自信家であり自分の才能でディーラーとしての実績を上げてきたと過信している。彼の頭の中には「**偶然、まぐれ、たまたま**」という言葉は存在しない。それゆえ自分の財産をすべて失うような取引をする。数年前のリーマンショックのことを思い出すとAAAの格付けを持ったサブプライム証券。深く考えればとてもリスクの高い証券であることは明白なのに自分にとって聞こえがいい「格付けAAA」だけを信じて売り買いをしまくった。



人間には自分にとって都合がいい情報を選んでしまう、という癖があります。多くの銀行が破たんし、多くのディーラーが職を失いました。

でも、そんなに「まぐれ」や「たまたま」ばかりで世界は出来ているわけではないよ、という声が聞こえてきそうです。では、思考実験をもう一つ。



■まず 10000 人のディーラーを準備します。あ、サルでもいいです (笑)。月ごとの勝率は 50%、負けも 50% です。(0.5)^N 乗で勝ち続けるディーラーの数が予測できます。6 か月勝ち続けるディーラーは 156 人、一年勝ち続けるカリスマディーラーは 2~3 人。問題は周囲の人々は 156 人もしくは 2 人のディーラーのみを研究の対象とすることです。そして後付のストーリーを描き下手をすると出版までしてしまう。本屋の投資コーナーにこんな本がたくさんありません

か？これをタレブは「**生存バイアス**」と呼んでいます。6 ヶ月勝ち続ける 156 人にばかり注目し 6 連勝できなかつた 9844 名のことをきれいすっきり忘れてしまうのです。進化の過程を考えて見ましょう。「自然淘汰」と呼ばれる考え方があります。地球の環境の変化に適応できた種だけが生き残り現在にいたる。しかしタレブはこのことも「たまたま地球環境に合った種が偶然生き残ったに過ぎない」と喝破します。この生存バイアスは本書の非常に重要な気づきです。

■誕生日パラドックスもわかりやすい例えです。でたらめに選んだ他人と誕生日を言い合って一致する確率は 365.2 に一つです。同じ年にするとさらに可能性は低くなります。ところがある部屋に人が 23 人いると仮定しましょう。そのうち二人の誕生日が同じである確率はどの程度でしょうか。答えは 50% です。どの人とどの人の誕生日が同じであるかを決めていないので、どの組み合わせであっても構わないからです。私もそうでしたがつい、 $365.2 \div 23 = 15.8$ と計算しがちです。

昨年、日本の物理学者がノーベル賞を受賞しました。LED についての研究でした。発見をしたのは当時日亜化学の会社員だった中村さんでした。もちろん世界中で同じ研究に取り組んでいた学者はたくさんいたはずですが、しかし、最初に発見した人は中村さんでした。発見者というのはある種の運に導かれているように私は思えます。発明者はちょっと違うような気がします。

以上、夢中になって書いてきたのですが、まだまだ内容は深いのです。急遽、今号を「まぐれとたまたま」前編とさせていただきます、具体的な事例については 2 月の中旬にお届けします。

株式会社アール・リサーチ 代表 柳本信一 Tel 042-300-0533 mobile 090-7428-8999
mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp